

安倍政権の掲げる「一億総活躍社会」実現へ向けての3本柱の一つ「介護離職ゼロ」。
不本意な「介護離職」をなくしていくため、
企業や介護事業者等はどのような取り組みを行っているのでしょうか。



介護相談も寄せられる 保育ルーム

「介護離職ゼロを実現するには、その受け皿である介護事業所の安定が必要」と、千葉県認知症介護指導者である有限会社ウエルフェアの田邊恒一代表取締役は力を込めて語ります。

千葉県習志野市にある同社は、2003年に民家を改築してグループホーム秋津を開設。翌2004年にはグループホーム谷津苑と認知症対応型通所介護「デイサービスセンター秋津」を開設しました。現在、職員は正規・非正規を含め約40人います。

7

有限会社ウエルフェア（介護事業所）

潜在的な介護人材を確保 保育ルームの併設で

「介護の仕事に興味はあるけれど、子どもがいるので働けない」という潜在的な介護人材に着目した有限会社ウエルフェアは、保育所を設置することで彼らが働ける環境を整え、職員を確保。「介護離職ゼロ」を実現するための受け皿である介護事業の安定化に努めています。

グループホーム谷津苑には、習志野市民間保育施設入所児童助成金の対象施設である「保育ルームロゼッタ」が併設されています。

保育ルームの設置は当初、「職員確保」が目的でした。8年前、介護業界全体が職員確保に苦戦していました。そんな時に、「介護の仕事に興味はあるけれど、子どもがいるので働けない」という声を聞いた田邊さんは、子どもを預かる場所があれば、潜在的な介護人材を確保することができるのではないかと、事業所内保育所の開設に踏み切りました。

2008年に、グループホーム谷津苑の空きスペースを改修・活用し、職員の子どもを預かる事業

所内保育所をスタート。当初1日最大3人までを預かっていましたが、地域住民からも「預かってほしい」との声が寄せられるようになり、2010年に再改修しました。スペースを拡大し、千葉県への届け出を経て、認可外保育施設として「保育ルームロゼッタ」を開設し



保育ルームロゼッタでは、職員や地域の子どもたちを預かっている

たのです。

現在、保育ルームの定員は12人で、対象は生後2カ月から就学前までです。料金は1時間500円ですが、同社職員は1時間300円で利用できます。休所日は年末年始のみで、保育時間は8時から



左から、保育ルームロゼッタの澤田慶子主任、田邊恒一代表取締役

有限会社ウェルフェア

設立：2004年

所在地：千葉県習志野市秋津5-5-6

TEL：047-451-6898

提供サービス：認知症対応型共同生活介護／認知症対応型通所介護／居宅介護支援事業所／認可外保育施設

従業員数：40人

18時まで、延長保育を含めると7時から20時までとなっています。

保育ルームを設置したこと、求人募集を出すと「子どもを預けられるなら、働きたい」との問い合わせも多数届けられるようになり、今、同社のグループホーム、デイサービスの職員それぞれ2人ずつ、計4人が預けています。

「この保育所の設置は、潜在的な介護人材を掘り起こし、職員として迎え入れ、人員基準を満たすことで、より質の高い介護サービス提供につながっています。今後の課題は、保育時間外の夜間帯の職員確保です」と、田邊さんは説明します。

介護離職ゼロを実現するうえで、介護事業者の安定はもちろん、地域にいる介護者のフォローも大切です。そのためには、介護の相談を広く受ける窓口を持つ必要があります。

保育ルームでは、日々の送り迎えを通じて保護者と顔の見える関係を築けており、介護についての質問や相談がスタッフに寄せられることもありますが、主任の澤田慶子さんは話します。「保護者のなかには、介護をされている方もいます。介護をしていない方からも、『認知

症が始まったかもしれない。どうすればよいのか』『介護施設にはどんな種類があるのか教えてほしい』などの質問や相談があります」

このような介護の相談に対しては、田邊さんをはじめ、グループホームの職員が適宜説明するなどに対応をしています。

家族の認知症や介護で悩んでいても、どこに相談すればいいのかわからない人も多くいますし、地域に介護施設があったとしても、相談に行くことにハードルの高さを感じる人もいます。そうした人にとって保育ルームは、気軽に相談できる場にもなっているのです。

認知症カフェで地域の介護者を支える

介護者が気軽に相談できる場として、同社では2014年12月から地域住民などと連携して認知症カフェも開いています。カフェの場所は、習志野市・袖ヶ浦団地の集会所で、団地には約3000世帯が住み、団地を含む地区の高齢化率も約30%と高くなっています。

カフェが行われるのは、毎月第3日曜日の10時から。団地の高齢者を中心に、1回に約30〜40人が

参加します。お茶やコーヒーを飲みながら、介護や認知症の相談をします。さまざまな相談に対応するのは、同社の介護職員や保育スタッフをはじめ、地域の医師や看護師、薬剤師、司法書士、歯科医師、民生委員、認知症の人と家族の会会員など多様な職種・立場の人です。

「カフェに来られても、暗い表情でじっとしている人には、こちらから声をかけるようにしています。誰かに話を聞いてほしくてカフェに来られているので、相談してもらえるきっかけや関係づくりを大切にしています」と、澤田さんは話します。

介護者に認知症の人と家族の会の人を紹介することもありますが、田

邊さんも語ります。

「介護者は、同じ立場の人の話に安心できるようです。『自分だけではない』『同じように頑張っている人がいる』という共感が、気持ちを軽くしてくれるでしょう」

介護離職を防ぐためにも、困ったときに「話を聞いてくれる場所」「相談に乗ってもらえる場所」「ちょっとした疑問を解消してくれる場所」の存在は重要です。

田邊さんは「私たち介護事業者の役割は、介護サービスの提供はもちろん、介護者が離職という選択をしなくてもよいように、正しい情報を伝えられる関係を築いていくことだと思います」と強調します。今後は、カフェの開催回数を増やしていきたいそうです。



袖ヶ浦団地カフェと称する認知症カフェには、袖ヶ浦団地住民を中心に多くの人が集まる

